

連鎖動詞 *come to* と *get to* の意味と統語に関する研究

藏菌和也

(関西学院大学大学院)

## 1. はじめに

現代英語の傾向として、動詞と *to* 不定詞とが結合して助動詞的な機能とアスペクトの意味を持つ傾向がみられることは古典的研究である Poutsma (1926: 297-9) や Kruisinga (1931: 226-7)、他にも Palmer (1987: 172-211), Brinton (1988: 68-73) などでも観察され議論の対象になっている。また、Twaddelle (1963: 22-23)以降、助動詞的な役割と動詞的な性質を併せ持つ動詞連鎖は連鎖動詞と呼ばれ分類されてきた。特に起動の意味「～し始める」を表す *come to* と *get to* は Quirk et al. (1985: 146-7)において連鎖動詞として分類されるようになった。この *come to* と *get to* は類義表現として英和辞典・英米の辞書・語法書では取り上げられているが、どのような統語的・意味的な特徴の違いがあるか、またその統語的な特徴と意味との対応関係の点に関してはまだ議論の余地がある。

本稿は、上述のことを背景に、意味的統語論の観点より起動の意味を表す *come to* と *get to* に焦点をあて、文法書や辞書での扱いをみながら、(i) 従来の扱い方にみられる問題点の検討、(ii) *come to* と *get to* の統語的・意味的な特徴の違いの解明 (iii) 統語的な特徴と意味との対応関係を明らかにしていく。

## 2. 先行研究

## 2.1 辞書の記述

起動の意味を表す連鎖動詞 *come to* と *get to* の統語的な特徴として、ユースプログレッシブ英和辞典(以降ユース)には *come to* に動詞の原形が後続して「～し始める」を意味する(1)の例が、また *Longman Advanced American Dictionary 2nd edition* (以降 *LAAD*<sup>2)</sup>には(2)のように *come to* に後続する動詞において *be working* のような進行相(*be+Ving*)を表す例がみられる(下線は筆者による。以下同じ)。さらに、*Longman Dictionary of Contemporary English 5th edition* (以降 *LDOCE*<sup>3)</sup>には独立型で使用される(3)のような例も記述されている。

また、*get to* に関して *LDOCE*<sup>3)</sup>には動詞の原形を後続させ起動の意味を表す例(4)が、*Macmillan English Dictionary 2nd edition* (以降 *MED*<sup>2)</sup>には(5)のように *Let's* と共起して呼びかけを表す命令文で使用される例がみられる。

意味的な違いを表す特徴的な記述として *Collins COBUILD Advanced Dictionary of English 7th edition* (以降 *COBUILD*<sup>7)</sup>からの用例(6)で示すように *come to* は「長い過程や長期間の末に」物事を始めるという記述がみられる。また、*get to* には同じく *COBUILD*<sup>7)</sup>の記述(7)に示すように「段階的・最終的に」ある段階に至るという記述がみられる。そして、(8), (9)のようにそれぞれによく後続する動詞を記述したものもみられる。レジスターに関して *MED*<sup>2)</sup>は *get to* を口語体(Informal)であるとしている。

- (1) In time she came to love him. (コース)
- (2) How did you come to be working here? (LAAD<sup>2</sup>)
- (3) Come to think of it, George did seem a bit depressed yesterday. (LDOCE<sup>5</sup>)
- (4) It'll take a while to get to know everyone. (LDOCE<sup>5</sup>)
- (5) Enough talking, let's get to work. (MED<sup>2</sup>)
- (6) If someone comes to do something, they do it at the end of a long process or long period of time (COBUILD<sup>7</sup>)
- (7) If you get to do something, you eventually or gradually reach a stage (COBUILD<sup>7</sup>)
- (8) come to know, understand, believe, realize, expect, accept, think, mean, love, appreciate, feel, see, regret, respect, cherish. (ウィズダム<sup>3</sup>)
- (9) get to be, know, hear, understand, hear, live, like, feel, love. (ウィズダム<sup>3</sup>)

## 2.2 語法書と論文の記述

語法書と論文の記述を確認していくと、小西(編)(1980: 271)は *come to* が起動の意味を表す際に思考・感情・感覚などを表す状態動詞をとり、状態動詞を動作化する働きを持つとしている。また、小西(編)(2006: 299)においても *be, like* などの動詞を後続動詞の例に挙げて状態動詞が後続するとしている。

Gesuato (2009)では動詞のアスペクトの観点から *come to* の調査を行っており、結果構文 *come to V* がどのような意味を表すかという点から記述がなされている。

With punctual verbs (e.g. *realize*), the construction hints at an *intervening* process – either the mere passing of time or an activity – *leading up* to the realization of an instantaneous event, whose resultant state (e.g. knowledge acquired) is left unmentioned. With stative verbs (e.g. *believe*), the construction signals the achievement of a state (i.e. ‘to be a believer’, ‘to be in a state of belief’) at *the end* of a *preceding* time span (signaled by *COME*) characterized by a different state (i.e. ‘not to believe’). With dynamic, non-punctual verbs (e.g. *develop*), the construction hints at the *gradual* unfolding of a process (i.e. ‘I started and continued to develop (until I finished developing)’). (Gesuato2009: 385-386)

上述の引用のなかで Gesuato 氏は *come to* は[1]瞬間動詞, [2]状態動詞, [3]動的・非瞬間的動作動詞が後続する場合において以下の意味を表すことを述べている。

[1]: 瞬間的出来事の実現までの過程を示すが、結果状態は示唆されない。

[2]: ある状態(以前とは異なる新たな状態)への到達を示す。

[3]: ある期間を通して行われるある過程の漸次的な展開を示し、その過程の継続または完了を示唆する。

また、これらの動詞が後続する際には漸次的な展開プロセスを表すという共通点が見られるという。

Carter and McCarthy (2006: 403)の記述では *get to* に関して次のような説明を加えて

いる。これによると連鎖動詞は表 1.のようにその動詞によって ①連鎖動詞において進行相を表す ②連鎖動詞に後続する語彙動詞において進行相を表すという 2つの選択があり、*get to* に後続する語彙動詞を進行相で表す例はみられなかったという。

表 1. 連鎖動詞句における進行相の例<sup>1</sup>

	indicated on catenative verb	indicated on lexical verb
appear to	No	<i>The mood <b>appears to be changing</b> slightly.</i>
fail to	<i>Leeds University professor Robin Alexander said the latest methods <b>were failing to teach</b> children properly</i>	no
get to	<i>I'm <b>getting to know</b> Damin better</i>	no
happen to	No	<i>I hope you don't mind. I <b>happened to be passing</b> and I used to live here once.</i>
manage to	<i>I think it's remarkable that we're <b>managing to keep</b> in touch. (+)</i>	<i>Some students even <b>manage to be 'working on a play'</b> for their entire three years at universities without anyone ever actually seeing so much as a page.</i>
seem to	<i>The university <b>were hanging on and seeming to think</b> the changes would not happen.</i>	<i>You <b>seem to be losing</b> weight rapidly. (+)</i>
tend to*	<i>Outside London, where jobs are scarce, they <b>are tending to accept</b> lower pay rather than fewer staff.</i>	<i>It's a bit infuriating cos you <b>tend to be paying</b> the Post Office a lot of extra money, or British Telecom.</i>

Data from Carter and McCarthy (2006: 403)

### 2.3 先行研究にみられる課題

Gesuato (2009)ではそれまでの先行研究と違い ①後続する動詞をアスペクトの観点から観察している ②構文 *come to V*の表す意味を挙げているという 2点で斬新である。一方、*come to*が *realize, believe, develop* など特定の動詞が後続するのに、同じ起動の意味の *get to*には後続しないのはなぜかというコロケーションの問題に関しては議論の余地がある。また、この後続動詞に要求される制限は何が要因で生まれるのかは明らかではない。

さらに、*come to*が後続動詞で進行相(*be+Ving*)と状態受動(*be+Vp.p.*)を表すのに対して、*get to*にはそのような例が観察されないという現象に対する包括的な説明がなされていない。そこで本研究では、*come to*と *get to*に後続する動詞や共起語を BNC と COCA を用いて調査し、前述した問題点について検討していく。また、本研究ではこれら統語的特徴の違いを *come to*と *get to*の意味に求める。

### 3. *come to*と *get to*の意味と統語

本節では、まず動詞の語彙アスペクトの観点から後続動詞の性質を観察し、*come to*と *get to*それぞれの補語選択にみられる制限を明らかにしていく。

#### 3.1 コーパス調査

BNC をみると、以下の表 2. の [1], [2] に示すような動詞が *come to* と *get to* に後続することが確認できる。表 2. をみると *come to* を好んで動詞 *see, think, live, rest, believe, take, stay, look, realize, do, dominate, expect, have* などが後続し、*get to* を好んで動詞 *sleep, talk, feel, like, love* が後続することがわかる。また、両者には動詞 *be, know, work* が共通して後続している。

表 2. BNC にみる連鎖動詞 *come to* と *get to* に後続する動詞<sup>2</sup>

[1] <i>come to</i> + <i>be, see, think, live, rest, know, believe, take, stay, work, look, realize (realise), do, dominate, expect, have.</i>
[2] <i>get to</i> + <i>be, know, work, sleep, talk, understand, feel, like, love.</i>

### 3.2 アスペクトの観点からの動詞分類

アスペクトの観点から動詞を分類した古典的な研究である Vendler (1967) から、その後のアスペクト研究を整理し、発展させたものの中に柏野(1999; 2012)がある。柏野(1999; 2012)の主張をまとめると表 3. と図 1. から図 3. で示すような動詞分類になる。この図 1. から図 3. の中で行為が始まる前の状態を S1 とし、行為が終わった後の状態を S2 としている。それぞれの動詞の特徴として、瞬間動作動詞には図 1 が示すように「始め(始)」と「終わり(終)」がほぼ重なり合い、「途中(中)」は認められないと述べている。また、継続動作動詞には図 2. が示すように「始め」「中」「終わり」が認められるという。さらに、状態動詞には状態の終わりはないことを図 3. で示している。

表 3. 柏野(1999)における動詞分類とその説明

動作動詞：「START(開始点)」「ENDPOINT(終点)」が認められる。
① 瞬間動作動詞(Achievement) [= 図 1.] 時を表す <i>at</i> 句と共起でき、その行為が一瞬で終わってしまう動詞 <i>At eight o'clock John finished his breakfast.</i> (柏野 1999: 116)
② 継続動作動詞 [= 図 2.] 時を示す <i>for</i> 句と共起でき、その行為が一定期間続く動詞 “ <i>I worked for him for nine years.</i> ” She said. (ibid.)
③ 状態動詞 [= 図 3.] (START と ENDPOINT が認められない) 状態を表す動詞は通例、命令形・進行形で用いない。

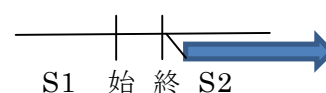
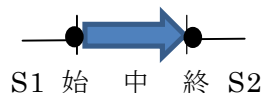
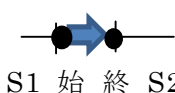


図 1. 瞬間動詞の意味構造 図 2. 継続動作動詞の意味構造 図 3. 状態動詞の意味構造

次に、*come to* と *get to* に後続する動詞 [1], [2] を前述の柏野(1999; 2012)の分類にあてはめてみると表 4. のようになることを先に述べておく。以降ではまず *come to* と *get to* に共通する後続動詞 *be, know, work* を観察し、これらが表 4. で示すように異なる意味を表し

ていること、また異なった統語的特徴を持つことを例証していく。

表 4. アスペクトの観点からみた *come to* と *get to* の後続動詞の意味分類

<p><i>come to</i> に後続する動詞の意味</p> <p>(A) 状態動詞 : <i>be, see, think, live, rest, know, believe, take, stay, work, look, dominate, expect, have.</i></p> <p>(B) 動作動詞 : ① 瞬間動作動詞 <i>realize (=realise).</i> ② 継続動作動詞 <i>work, do.</i></p>
<p><i>get to</i> に後続する動詞の意味</p> <p>(C) 状態動詞 : <i>be.</i></p> <p>(D) 動作動詞 : ① 瞬間動作動詞 <i>know, understand, feel, like, love.</i> ② 継続動作動詞 <i>work, sleep, talk.</i></p>

まず、*come to* は後続動詞に「始め」「途中(プロセス)」「終わり」の中でも「プロセス」を要求し、ある「結果」への到達を表すという傾向がみられる。用例(10)では *come to be* が *in the past decade or so* という期間を表す副詞句と共起し、ある一定期間のプロセスを経て、その結果ある状態に到達したことを意味している。

一方、*get to* は「開始」と「終点」を後続動詞に求め、動作性が強いという特徴がみられる。用例(12)では *get to be* が頻度副詞 *sometimes* と共起しており、本来は非完結性を持つ状態動詞 *be* が、*get to* に後続すると習慣的に生起する「一時的・完結的な状態」の意味で使われている。このことから、動詞 *be* が *get to* と共起すると「開始点」「終点」のはっきりした一時的・完結的な状態の生起を表すことが確認できる。

(10) Though “retirement” has come to be a rather vague term in the past decade or so, hasn’t it? (COCA)

(11) BURNS: ... Nearly two dozen other war wounded arrived in Landstuhl hospital today as well. Does it get to be too much sometimes?

GAMBLE: It's always hard to see, see wounded people. (COCA)

次に *come to know* と *get to know* の違いだが、(12)は *come to know* と副詞句 *over the years* が共起し、7年間で自身が住んでいる地域のことを「知っている」という状態に至ったという「結果状態」への到達を表している。一方、*know* が *get to* に後続した場合の例(13)は、主語が「知る(知り合う)」という「行為」を楽しむという意味を表している。このことから *get to know* が結果状態ではなく、完結的な動作の意味を表していることが確認できる。

(12) In the seven years we lived there, only once did I ever meet another fisherman on my favourite part of the river; and over the years I came to know the South Tyne and its wildlife .... (BNC)

(13) Training Weekend Aston Clinton 14-16th November 1986. We have some spare

places and would welcome any Q.T's who are interested in seeing the training course in action. Several Q.T's have joined us over the months and have greatly enjoyed getting to know the students and working with them. (BNC)

最後に *get to work* は命令文を表す *Let's* と共起する(14)のような例が多く見られることから動作性が強く、動作主の意図的な動作の開始を表すと考えられる。一方で *come to work* は *Let's* との共起例が BNC と COCA に見られず、動作性は弱いと考えられる。また、(15)のように「働くようになった」という「結果」への到達を表すという特徴がみられる。さらに、その「結果状態(活動状態)」が長年に渡り「継続」されてきたことを、*for all these years* のような期間を表す副詞句を伴って表すこともできる。これらの点から両表現は表す意味と統語特徴が異なると言える。

(14) "... Let's get to work on this right now!" "Get to work?" "Yes. Although I have to confess I've already been working on it. I'm sure you know what the problem is between yourself and Tom." (BNC)

(15) Much more important to Miss Marguerite is the fact that she has come to work at the Woman's Industrial Exchange for all these years. (COCA)

以上の点から *be, know, work* が *come to* に後続した場合と *get to* に後続した場合では、表す意味も統語的特徴も異なるといえる。*come to* は「プロセス」を表す動作・状態動詞との結びつきが強く、あるプロセスを経て至った「結果」を強調する表現であると言える。また、*get to* は「完結性」を持った状態の生起・動作を表す動詞との結びつきが強く、「動作性」を強調する表現であると考えられる。

### 3.3 その他後続動詞のアスペクト的意味

前節で述べた動詞以外にも *come to* には動詞 *live, believe, expect, dominate, have* が後続する。これらは状態動詞であり、それぞれが *come to* に後続すると、ある「プロセス」を経てある状態に到達したことを意味する。以下に用例(16)から(20)を挙げておく。また、動詞 *see, rest, take, stay, look* に関しても用例(21)から(25)で示すように *see, take, look* は「～とみなす/～に見える」*rest* は「静止している(状態)」*stay* は「～の状態のままである」という状態の意味を表しており、*come to* に後続するとある一定の「プロセス」を経てある状態に到達したことを表す点に共通性がみられる。

(16) The third situation, much more common, was when a grandparent abandoned living independently, either following widowhood, or through infirmity. This does not show up in the household statistics because many of these stays were for a brief few months right at the end of life. It was above all grandmothers who came to live with their children in this way: five times as many as grandfathers. (BNC)

(17) A second example is the uneasy suspicion that we Christians believe only because we are less sceptical and therefore more shallow in our thinking. The truth is often

the reverse.... But many Christians have come to believe because they were more sceptical than most. (BNC)

(18) Today we look to our primary schools to make learning rather more adventurous than this. We have come to expect that the programmes undertaken will fit the child, matching his or her age, aptitude and ability with a learning experience....

(BNC)

(19) GEMA organized and led the “Change the Constitution” movement which had as its objective the prevention of the vice-president taking power in an interim period before an election, and which came to dominate party politics in the mid 1970s.

(BNC)

(20) proctor, term once used for a person who collected alms for lepers and other beggars; the term came to have a bad meaning because of the abuse of the system.

(BNC)

(21) Elite performers earn that title because they are, by nature, not good losers. Yet they can come to see one opponent as the rock upon which they will undoubtedly founder. This results in dispirited performances, sometimes marred by feigned injuries. (BNC)

(22) So she murmured soothing words and patted Eleanor's shoulder until, little by little, the rocking and moaning subsided like the vibration of a spring coming to rest. “Did you know,” said Melissa when Eleanor at last became quiet, “that there's been another murder?” (BNC)

(23) The nadir was reached when the Royal 600cc class went out with only 10 starters and although it developed into a tremendous race between Joey Dunlop and Ian King, there wasn't the strength in depth which we have come to take for granted.

(BNC)

(24) The subsidies of 1514, 1515, and 1516 abandoned the separate assessment of the peerage by rank and levied taxation entirely according to income. The new directly assessed tax had come to stay as the main supplement to the King's ordinary revenue.... (BNC)

(25) Herons, flamingos, spoonbills and cranes are examples, some of which can be seen elsewhere in the park. They are not necessarily closely related; but have come to look alike because they forage for food in places such as wetlands and grasslands where these physical features have an advantage. (BNC)

また、動詞 *do* が *come to* に後続する場合も用例(26)のように副詞句 *over the years* の表す期間をかけて NFL と取引を行うという「結果」に至ったことを表す。この点からも、*come to* が「プロセス」を表す動詞と結びつく傾向が強く、ある「結果」への到達を表すことが改めて確認できる。

(26) Then again, like so many others who have come to do business with the NFL over

the years, Wildhack had a close bond with Goodell. (COCA)

動詞 *realize* に関して Gesuato (2009)は瞬間動詞として扱い、*come to*に後続した際には動作の展開プロセスを表すとしている。では、なぜ通例プロセスを語彙的意味に持たないはずの瞬間動詞 *realize* が「結果状態」を表す構文 *come to*に後続し、展開プロセスを表すことが可能なのだろうか。その理由の一つは *realize* の持つ「漸次性」にあると考えられる。実際、*realize* には「徐々にわかり始める」という意味<sup>3</sup>があり、用例(27)のように *gradually* などの漸次的な展開を表す副詞と共に起す。このことから *realize* が *come to*に後続する際には瞬間動詞 *realize* の意味と「漸次性」の意味の両方が融合して、終点に至る直前のプロセスが時間的に拡大されて認識されていることが確認できる。

(27) Gradually he came to realize that something was seriously amiss. (BNC)

また、二つ目の理由として *realize* が瞬間動詞としての意味のほかに、状態動詞としての意味特性を持っていることが挙げられる。実際に、柏野 (1999: 120)や Azar (1999: 15)のように *realize* の状態動詞としての意味を認める傾向があり、この状態動詞としての意味素性が影響して動詞 *realize* と「結果状態」を表す構文 *come to*との間に強い意味的結びつきを生じさせていると考えられる。

### 3.4 *get to* に後続するその他の動詞

*get to* に後続する動詞には以下の例(28), (29)に示す *sleep*, *talk* のような「開始点」と「終点」を持つ動詞がみられ、「寝付く」「話す」を意味する。さらに用例(30)では *understand* が「わかる」、(31)は *like* が「(すぐに)気に入る」、(32)では *feel woozy* が「(一時的な)だるさを感じる」、(33)では *love* 「(人が鳥を)愛する」という動作の意味を表している。このことから *get to* は動作性が強く、動作 *sleep*, *talk* の開始を表すうえに、状態動詞 *understand*, *like*, *feel*, *love* が後続した場合でも動作の意味で使われることが確認できる。

(28) It was bad enough already sleeping there. In fact, it was fucking horrible. The roof leaked. Every time it rained you had to move your bed. And after that, of course, we couldn't get to sleep. Every little noise we thought was another assault wave of killer mice. (BNC)

(29) GREG: It's really a great opportunity to get to talk to you. I've developed a class based on your "Connections" series. I communicated to you several years ago about that. And it's been a lot of fun. (COCA)

(30) Now, they've spent the last day and a half getting to know each other, getting to understand their shared background of more than two decades in the construction industry but now it's time to get down to work. (COCA)

(31) "I'm a big believer in never looking back," Pat Modell said. "When we moved to Baltimore, I immediately got to like it. Why not like it? (COCA)

(32) On Wednesday mid-afternoon you could have fried eggs on the stove-hot macadam.



It was tiring me no end, the distance, and I was getting to feel woozy on my feet. At the gallery they fetched me a chair. (COCA)

- (33) She had begun to weep. Nothing would induce her, she whispered, to have another bird in the house after poor Beano had gone. You got to love a bird like a human. (BNC)

### 3.5 *come to* と *get to* の意味と統語特徴との関係性

これまでみてきたように *come to* には「プロセス」と「結果(結果状態)」を、*get to* には「開始・終点」を語彙的意味に持つ動詞が後続しやすい傾向がみられる。なぜこのような現象が生じるのかを *come to* と *get to* の意味との関係性から説明していく。

まず、*come to* の意味素性に着目すると *come to* はある期間やプロセスを経て物事がある結果に至ることに着目した「プロセス・結果」重視の連鎖動詞である。ゆえに、「プロセス」を表す動作・状態動詞との結びつきが強いと考えられる。また、*come* は *come right*, *come good* などにみられるように実現される「結果」を表す性質を持っており、その語彙的性質が結果構文 *come to V* の意味的・統語的な特徴に影響を与えていると考えられる。

さらに、*get to* の場合には *get* が動作性の強い動詞であるため、「完結性(開始点・終点)」を持つ動詞を好んで後続させる傾向が強いと考えられる。

### 3.6 連鎖動詞の意味と進行・受身表現

次に本節では、*come to* は後続する語彙動詞で進行相と状態受動を表すことが可能であるのに対して、*get to* にはその特徴はみられない理由について説明を加える。

BNC で *come to be Ving* の現在分詞にくる動詞をみると、表 4. の [1] に示すような現在分詞がきて (34) のように使用されていることが観察できる。ここで注目すべきは、(34) に示した *be+Ving* が「(結果)状態の強調」を表している点である。また、*come to* は表 4. の [2] に示すような過去分詞を後続させて (35) のように状態受動(ある行為の結果生まれた状態)を、つまり結果状態を表すという特徴がみられる。

表 4. 起動を表す連鎖動詞 *come to* に後続する現在分詞・過去分詞

[1] living, discussing, wandering, thinking, sharing, looking, walking, talking, standing, sitting, piloting, having, doing, defending, crossing, carrying.
[2] accepted, assessed, associated, dominated, identified, known, recognized, regarded, seen, understood, used, viewed.

- (34) He took the call in the sitting room and Rain sat on a red-painted kitchen chair and wondered how he came to be living in such circumstances. (BNC)

- (35) German history is characterised by such external domination, as successive powers on the periphery of Europe (France, Russia, Turkey, Sweden and even the USA) are seen by the Germans to have exerted control over its centre, dividing and ruling. During the 19th and 20th centuries, this came to be known as the policy of the balance of power, and was principally associated with perfidious Albion. (BNC)

Hornby (1956: 79)は *come* が *to* 不定詞と用いられた場合には、行為の結果または行為の結果生じたものを表すとしているほか、Gesuato (2009: 384-386)も *come to* を結果構文として扱っている。つまり、*come to* は結果状態を表すことができる。その機能を有するがゆえに *come to* はその後続する動詞において進行相と、状態受動を表すことが可能となる。

一方で、*get to* は完結的な状態の生起や動作の開始を表すので、結果状態に関しては言及しない表現である。ゆえに進行相と状態受動を *get to* に後続する動詞において表さないのである。このことは *come to* と *get to* の統語特徴と意味とが密接に関係していることを示す興味深い現象である。

#### 4. 結語

本稿では、なぜある性質の動詞がある語と結びつくのかというコロケーションの観点と動詞のアスペクトの観点から連鎖動詞 *come to* と *get to* の統語的・意味的差異を明らかにした。

まず、後続動詞や共起語を比較することで *come to* がプロセスの意味を表す状態・動作動詞と強く結びつき、「結果」を表す構文であることを示した。一方で *get to* が完結的な状態の生起や完結的な動作を表す動詞との結びつきが強い傾向にあることを示した。

そしてその選択制限が *come to* の「プロセス」に着目した連鎖動詞としての性質と、*come* の表す「結果」の意味的特性に起因することを論じた。一方で、*get to* は *get* が動作性の強い動詞であるがゆえに「完結性」を持った状態・動作を表す動詞との意味的結び付きが強いことを論じた。

最後に *come to* の「結果状態」を表すという性質が「後続する語彙動詞において進行相・状態受動を表せる」という統語的な制限に影響を与えていることを論じ、連鎖動詞 *come to* と *get to* の意味の違いが統語の違いに影響を与えることを明らかにした。

#### 注

1. 進行相は時に連鎖動詞自身で表わされたり、また連鎖動詞に後続する語彙動詞で表されたりする時がある。表 1.の中にある(+)印は、ある連鎖動詞の中でその両方が可能である場合に、より使用頻度が高いことを表すために付けられている。
2. BNC-SCN の「語句集計」機能を用いて *come to* と *get to* に後続する動詞を抽出し、起動の意味で使われる動詞のみを提示した。
3. MED<sup>2</sup> の *realize* の項を参照。

#### 参考文献

- Azar, B.S. (1999). *Understanding and Using English Grammar* (3rd ed.). Upper Saddle River: Prentice Hall Regents.
- Brinton, J. (1988). *The Development of English Aspectual Systems: Aspectualizers and Post-Verbal Particles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carter, R. and M. McCarthy. (2006). *Cambridge Grammar of English: A*

*Comprehensive Guide; Spoken and Written English Grammar and Usage.*

Cambridge: Cambridge University Press.

- Gesuato, S. (2009). 'Encoding of Goal-Directed Motion vs. Resultative Aspect in the COME + Infinitive Construction'. In Renouf, A. and A. Kehoe. (eds.). (2009). *Corpus Linguistics: Refinements and Reassessments*. Amsterdam: Rodopi, 382-400.
- Hornby, A. S. (1956). *A Guide to Patterns and Usage in English*. Tokyo: Kenkyusha.
- Kruisinga, E. (1931). *A Handbook of Present-Day English, Part II: English Accidence and Syntax, Vol. I* (5th ed). Groningen: P. Noordhoff.
- Palmer, F. R. (1987). *The English Verb* (2nd ed.). Longman; New York: Longman.
- Poutsma, H. (1926). *A Grammar of Late Modern English, Part II: The Parts of Speech, Section II: The Verb and The Particles*. Groningen: P. Noordhoff.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Longman.
- Twaddell, W. F. (1963). *The English Verb Auxiliaries* (2nd ed.). Providence, R.I.: Brown University Press.
- Vendler, Z. (1967). *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.
- Wood, F. T. (1965). *English Verbal Idioms*. London: Macmillan.
- 柏野健次. (1999). 『テンスとアスペクトの語法』東京：開拓社 .
- 柏野健次. (2012). 『英語語法詳解：英語語法学の確立へ向けて』東京：三省堂 .
- 小西友七(編). (1980). 『英語基本動詞辞典』東京：研究社 .
- 小西友七(編). (2006). 『現代英語語法辞典』東京：三省堂 .

#### 辞書 (略号)

*CALD*<sup>4</sup>: *Cambridge Advanced Learner's Dictionary* (4th ed.). 2013. Cambridge: Cambridge University Press.

*COBUILD*<sup>7</sup>: *Collins COBUILD Advanced Dictionary of English* (7th ed.). 2012. Boston: National Geographic Learning.

*LDOCE*<sup>5</sup>: *Longman Dictionary of Contemporary English* (5th ed.). 2009. Harlow: Pearson Education.

*LAAD*<sup>2</sup>: *Longman Advanced American Dictionary* (2nd ed.). 2007. Harlow: Pearson Education.

*MED*<sup>2</sup>: *Macmillan English Dictionary: for Advanced Learners*. (2nd ed.). 2007. Oxford: Macmillan Education.

ウィズダム<sup>3</sup>: 『ウィズダム英和辞典 第3版』. (2013). 東京：三省堂 .

ユース: 『ユースプログレッシブ英和辞典』. (2004). 東京：小学館 .

#### コーパス

BNC: The British National Corpus (小学館コーパスネットワーク・Sketch Engine を利用)

COCA: The Corpus of Contemporary American English